M と R

若島 正

今から七年ほど前の話である。わたしは青土社の編集者である津田新吾さんと一緒に、カブレラ＝インファンテの『煙に巻かれて』のゲラを最終点検していた。場所もよく憶えている。新宿紀伊国屋の裏にあった、トップスの一階だ。

『煙に巻かれて』の翻訳には、約十年かかった。たしか柴田元幸さんが「世界で最高に駄洒落の多い本」と評していたような記憶がある。そういう本なので、ある言葉を訳すのに一年以上かかることもあり、それだけ難航していたわけだ。当然ながら、この本は翻訳不可能ではないかと挫折することしばしばで、そのたびに津田さんの激励を受けて、また少しずつ進むということを繰り返した。まあしかし、十年も続けていればどれほどの難物でも終わりに近づくわけで、その最終点検のときには、やれるだけのことはやったという気分になっていたのは間違いない。

ところが、である。翻訳者というのは因果なもので、ささいなことが気になって仕方がない。ある本を隅から隅まで完璧に理解することはどだい無理な話であり、いちおうわかったようなつもりになっているが実はよくわからない部分が、記憶のどこかに蓄積されていく。この『煙に巻かれて』のようにトリッキーで厄介なものになるとなおさらだ。これをすべて理解することなど、一生かかってもできるような気がしない。そういうわけで、これでようやく完成というそのときになって、ふと、頭のどこかにひっかかっていた個所が、意識の表面に浮上してきた。まだ一つだけあるんですが、ここがどうもよくわからないんですよ、と津田さんに見せたのが次のような一節だ。

> R, the antecessor of M, is marinating himself, in a Turkish bath, partially clad in a towel, a fading cigar in his hand.
>
> M の前任者である R は、トルコ風呂でマリネ漬けになり、タオル一枚の恰好で、火の消えかかった葉巻を手にしている。

ここはヒッチコック映画と葉巻という話の流れで、ヒッチコックの *Secret Agent*（邦題は『間諜最後の日』）が論じられているところである。この文章じたいには、まったく解釈や翻訳に困るようなところはない。ここで、トルコ風呂で汗を流しながら葉巻を吸っている R とは、名前を口に出せないのでただ「R」と呼ばれるほどの、英国情報局の大物である。

しかし、問題は英文解釈とは別のところにある。「M の前任者である R」と書かれているが、その M とはいったい何者だろうか？　いくら『間諜最後の日』を観ても、その映画の中のどこにも M なる人物は出てこない。ということは……？？

今から振り返ってみると、どうしてそれくらいのことがわからなかったのかと不思議に思うような、ごく簡単なことなのだが、何かがわからないときはそういうものだ（簡単じゃないか、とお思いになる教養豊かな方は、これからしばらく我慢して先をお読みいただきたい）。謎々を振ってみた相手の津田さんも首をひねっていたのだから、やはり誰にも盲点はあるらしい。

とにかく、そうやって二人で三十分近く考え込んでいただろうか。わからないときにまず調べてみるのは、カブレラ＝インファンテ自身の翻訳によるスペイン語版だ。そこで、それを取り出して、当該個所を見てみた。

> R, antecesor de M, se está marinando en un baño turco, encubierto tras una toalla, con un puro desplumado en la mano.

一見して見当がつくのは、英語がそのままスペイン語になっているということ。どうもここには手がかりは見つからないようだ。

はて、困ったな……と、喫茶店の窓から外の通りを眺めたその瞬間、まさしく天啓のように、答えが閃いた。なんだ、００７じゃないか！

説明するまでもないかもしれないが、イアン・フレミングが原作を書き、映画で大ヒットした００７のシリーズに出てくる、英国情報局員００７の上司が M なのである。もちろん、『間諜最後の日』は００７より二十年以上前の作品なので、R が「M の前任者」と呼ばれるのもこれでようやく納得できる。

どんなにささやかなものでも、わからなかったことがわかるようになるのは嬉しいことだ。ましてやそれが、カブレラ＝インファンテのジョークとくればいっそう嬉しい。上機嫌で喫茶店を出たことを、今でも憶えている。そして、それが津田新吾さんにお会いした最後の機会になった。

そんな七年前の体験を思い出したのは、ラテンアメリカ文学、とりわけカブレラ＝インファンテ、プイグ、サルドゥイといった、比較的マージナルな作家たちを好んで英訳している翻訳家のスザンヌ・ジル・レヴィンが出したラテンアメリカ文学の翻訳論 *The Subversive Scribe: Translating Latin American Fiction* (1991)を読んでいたときのことである。*Tres tristes tigres*（英訳版 *Three Trapped Tigers*）や *La habana para un infante difunto*（英訳版 *Infante’s Inferno*、邦訳版『亡き王子のためのハバーナ』）の翻訳をめぐっての、翻訳者と作者とのやりとりが実に楽しく描かれていて、うらやましくなった。そのつきあいぶりもさることながら、希代の語呂つきカブレラ＝インファンテを相手に丁々発止とわたり合う、翻訳者の言語遊戯の才能にいささか嫉妬したのである。そこから必然的に、わたし自身のカブレラ＝インファンテ翻訳体験を思い出したというわけだ。

あるインタビューによれば、スザンヌ・ジル・レヴィンが *Tres tristes tigres* の翻訳を手伝い始めたとき、彼女はまだスペイン語を勉強しているところだったという。しかしカブレラ＝インファンテは彼女の翻訳者としての才能を高く買った。彼自身の言葉によればこうだ。「ハンフリー・ボガートがローレン・バコールに言うように、彼女は達者だ。実に達者だ。（“She’s good. She’s very good.”）」（“Guillermo Cabrera Infante: An Interview in a summer manner with Jason Wilson,” John King (ed.), *Modern Latin American Fiction: A Survey*, Faber and Faber 1987 に収録。）

カブレラ＝インファンテの揚げ足を取るつもりはまったくないが、ここで注釈を差し挟ませていただきたい。ハワード・ホークスの *The Big Sleep*（邦題は『三つ数えろ』）の終わり近く、殺されそうになったフィリップ・マーロウ（ボガート）はヴィヴィアン（バコール）に救われる。その後で、車の中でヴィヴィアンと二人きりにな

ったマーロウが彼女に向かって言う言葉は、“You looked good. Awful good.”である。

どうでもいい指摘のように思われるかもしれないが、そうとも言い切れないのは、このボガートの台詞が『三つ数えろ』の中でもしばしば引用される名文句だからで、たとえばホークス関連書四冊を扱った書評で、大御所マイケル・ウッドは冒頭にこの台詞を引用し、“You looked good.”とは危険な場面にあっても冷静さを失わず、内心の恐怖を顔に出さないヴィヴイアンを讃えた言葉であると読み解く。そのクールなスタイルがすなわち人間としてのすばらしさだというわけである。ついでに言えば、マイケル・ウッドはその書評に“Looking Good”という題を付けている（*The New York Review of Books* 1997 年 11 月 27 日号）。

さて、これがカブレラ＝インファンテの単なる記憶違いによるものか、それとも意図的なずらしによるものかは、すぐには判定しがたい。『煙に巻かれて』の自由な引用の仕方から推測すると、記憶をもとにして自由に手を加えたというのが本当のところではないかと思うが、それではカブレラ＝インファンテがなぜボガートのこの台詞を引用したのか、わたしたちはその理由も想像することができる。つまり、それはただ単に、スザンヌ・ジル・レヴィンの翻訳者としての技量が優れていたということだけではない。『三つ数えろ』の文脈と重ね合わせてみればわかるように、「危ないところを女性に助けてもらった」という含みがあるのだ。前述のインタビューに見られるカブレラ＝インファンテ自身の言葉によれば、版元のジョナサン・ケイプ社が最初に翻訳者として選んだのは、スペイン語をまったく知らない詩人であったという。カブレラ＝インファンテはかなりの手助けをしたが、結局この男はある晩にとんずらしてしまったとか。当時カブレラ＝インファンテは映画 *Vanishing Point* のシナリオを書いていて、難物 *Tres tristes tigres* の翻訳を一人で仕上げる余裕がなかった。スザンヌ・ジル・レヴィンの出現が、まさしく彼を救ったのである。

カブレラ＝インファンテが彼の書くあらゆる文章の中で訴えかけているのは、彼とわたしたち読者が共有しうる、映画体験である。それは何も映画だけに限らない。文学だってそうだし、もっと広く文化と言い換えてもいい。それをスザンヌ・ジル・レヴィンは「集合的記憶」(collective memory)と言い当てている。それは映画的記憶、文学的記憶を含んだ、集合的な文化の記憶である。カブレラ＝インファンテはわたしたち読者に、そうした場に参与することを誘っているのだ。

カブレラ＝インファンテや、ウラジーミル・ナボコフのように、作品中にこうしたアリュージョンをふんだんに盛り込むタイプの作家は、それだけで高踏的かつ難解だと一般読者から思われがちである。要するに、「衒学的（ペダンティック）」な作家だと。わたしはこの「衒学的」という言葉が嫌いだ。そこには、知識のひけらかし、つまりは奇を衒った、見せかけだという非難が露骨に現れている。しかし、事態はそれとはまったく逆

ではないのか、とわたしは思う。カブレラ＝インファンテやナボコフのような作家は、作者とわたしたち読者が共有できる場をはっきりと指示してくれているだけなのだ。もしカブレラ＝インファンテが今でも生きていて、わたしの目の前にいるなら、わたしは彼と００７について語り合うこともできるだろう（そういう事態は、００７を観ているとは思えないナボコフの場合には想像できないが）。たとえば『００７ロシアより愛をこめて』で、ソ連の女スパイ役を演じるダニエラ・ビアンキ（彼女の名前は、この映画を観た人間には永遠に記憶されるはずだ）が、身につけているものは黒いチョーカーだけ（！）という姿でベッドに横になっているあの場面について、ぜひ語り合いたいと思う。そして興が乗れば、００７シリーズの主題歌では名曲中の名曲である、シャーリー・バッシーが歌う「ゴールドフィンガー」と「ダイヤモンドは永遠に」（いずれもジョン・バリー作曲。その彼も昨年に亡くなった。合掌）を一緒に歌いたいと思う。それはなにも、知識のひけらかしということではまったくない。普通の映画ファンなら（そして、わたしもその一人のつもりだが）誰でも憶えているはずのことを憶えているだけにすぎない。

わたしたちは文学研究者と呼ばれるが、なぜ文学を研究するのかと問われれば、簡単には答えは出てこない。しかし、わたしの本音を言わせてもらえば、目的と手段を混同しているようで気が引けるが、まず自分の文学的体験とその記憶、そして広くは文化的体験とその記憶を豊かにすること、それが何よりも大切ではないかと思う。カブレラ＝インファンテを読んでいると、そのことがよくわかる。彼がどれほど文学や映画を実体験として生きてきたか、それがよくわかる。それをスペイン語圏のみならず、どのような言語圏でも共有できる基盤として読者に提示していることがよくわかる（彼が英語で書き始めたのは、必然のことではなかった。亡命先にイギリスではなくフランスを選んでいたら、おそらくフランス語で書き始めただろうと彼は言っている）。それがよくわかるからこそ、わたしはカブレラ＝インファンテを読むのである。わたしにとっては、決して知識の蓄積ではないそのような体験と記憶を蓄積するだけで充分だとも思うが、さらに高望みをすれば、自分が書物として生み出す研究や翻訳は、それもまた文化的記憶の一部に連なってくれればと願うのみである。

そういう思いを共有していた、故津田新吾氏にこのささやかな一文は捧げられる。最後に別れたとき、津田さんは「ぜひ一緒に、カブレラ＝インファンテをもう一冊やりましょう」と励ましの言葉をかけてくれた。十年も苦労をかけたのに、まだもう一冊（ということは、また十年）付き合いたいと言ってくれるのか、と驚いたのを今でも憶えている。あのときの約束をどうやって果たせばいいのか、いまだに答えは見つかっていない。